

成果報告書

地域文化倶楽部(仮称)創設支援事業

団体名	公益財団法人可児市文化芸術振興財団		
所在地	岐阜県可児市	設立年	平成12年
運営主体	公益財団法人可児市文化芸術振興財団		
事業目標	<p>本事業は、当財団が可児市文化創造センターalaにおいて2008年度より14年間に渡って実践してきた『まち元気プロジェクト』のノウハウを活かし、2020年度から構想を進める文化芸術を活用した社会的処方箋活動『まち元気そうだん室』という地域の社会機関・民間ステークホルダー・アーティストとの「プログラム共創化」に向けた取り組みの一環として実施する。市内在住の中学生(及び高校生)を対象とし、演劇等ワークショップや地域の文化資源等を活用した「地域文化倶楽部」の活動を、地域社会への愛着とそこに住む人々全てのWell-beingを追求する「社会活動」へと発展させる入口とし、つながりの持続可能性とライフステージの循環性を高める多世代型の取り組みにすることを旨とする。</p>		
きっかけ	<p>当財団が運営する可児市文化創造センターalaは、人々の思い出が詰まった『人間の家』として「つながりを醸成する〈社会包摂型劇場経営〉」を推進しており、文化芸術を愛好する人たちだけでなく、あらゆる層の市民が生きがいを持ち、安心して集うことのできるもう一つの我が家のような存在として、文化芸術で生きる活力とコミュニティを創出し、誰ひとり孤立させない社会を旨として活動してきた。</p> <p>しかしながら、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大により、全ての市立小・中学校と不登校教室「スマイリングルーム」の児童・生徒に向けたアウトリーチの演劇等ワークショップが事実上2年間に渡って中止またはオンライン開催を余儀なくされており、不登校児童・生徒数の割合は上昇している。また、保護者の収入減少による経済的な困窮なども相まって「こどもの社会的孤立」や「つながりの貧困」が深刻度を増していることから、alaでは、これら課題の緩和に向けて市の学校教育課や教育研究所との連携を強化し、不登校問題を軸に芸術文化のスキルを活かす「エッセンシャルワーカー」としての文化芸術団体およびその従事者という新しい役割を担うことを検討している。</p> <p>これらの役割は、財団職員や学校の教職員が従来の所掌業務を維持しながら同時に担うことは不可能であり、地域の社会機関・民間ステークホルダー・アーティストとの関係を編み直すことで、その緩和策を地域や市民活動と協働で考えるために『まち元気そうだん室ラウンドテーブル』という話し合いの場を2020年に組成している。アフター・コロナの日常における人々のメンタルヘルス維持とレジリエンス(回復力)獲得を地域社会全体の「多世代のつながり」に結び付けながら展開することを構想しており、公共劇場がその「プラットフォーム」として機能するための環境整備やネットワーク構築、財源確保の道筋を探っている。</p>		
団体・組織等の連携	可児市教育委員会(教育研究所スマイリングルーム)、社会福祉法人可児市社会福祉協議会、NPO法人可児市国際交流協会(多文化共生センター フレビア)、NPO法人alaクルーズ、令和さくら高等学院 可児 ほか		
活動場所	可児市文化創造センターala内(創造スタッフ室ほか)		
活動概要	<p>alaが実施する文化芸術コミュニティ・プログラムを体験し、その経験を活かしてala事業の運営をお手伝いしたり、自ら企画内容を立案・実施することを通じて、さまざまな世代の市民と触れ合いながら「まちを元気にする活動」を展開するもの。</p> <p>市内外から28名の中・高生が登録し、年間(6~2月)で計66回の活動を可児市文化創造センターalaにて実施した。</p>		

○本事業による成果

・中学生は市内5校のうち3校(中部中、蘇南中、西可児中)から9名の生徒が集まったほか、近隣市(美濃加茂市、犬山市)から3名の計12名、高校生は計16名(可児高11名、美濃加茂高1名、加茂高1名、通信制高校3名)がエントリーした。それぞれ繁忙期が異なることから参加時期に偏りがあったが、全体としては「中高一貫」の部活動となった。

・劇場運営と連動した部活動のメリットは、基本的に劇場で実施されている既存の事業をベースに中高生に参画してもらう形式のため、劇場と学校の活動を一元化するメリットは相互にとって十分あり、結果として教員側の負担軽減に繋げることが可能であると感じた。また学校行事や体調により参加が不可能となった場合でも、劇場側が通常業務の範囲内でカバーすることが可能であることから、参加する子どもたちにとっても必ず出席しなければならないというストレスが軽く、できる時に目いっぱい参加するというスタンスで、不登校傾向を抱えた児童生徒でも途中で投げ出すことなく最後まで活動に参加できていたことから、不登校時の引きこもり回避対策としても一定の効果を発揮できるといえる。

・従来のような作品制作・発表ありきの活動とは異なるものの、来て頂いた一般の参加者とのコミュニケーションやおもてなしを通じて、「人を楽しませる、喜ばせる」という達成感を得られる部活動として手ごたえを感じている。

・一年間の「活動報告会」を一般公開し、部活動への参加したメンバー自らが活動を通じて地域のために、自分のために、どんなことができ、何を感じたかを発表したほか、その様子をもとに1時間のラジオ番組を制作し、地元のFMららにて放映した。

○児童・生徒への指導に関する工夫

・各プログラムには専門的な知見を持ったアーティストなどが参画しており、実施した企画毎に指導やアドバイスをもらえる専門家が異なっていることも劇場を拠点とする「まち元気部」ならではの特徴であり、部活動の参加者は、毎回多様な大人たちとの新鮮な出会いを感じながら取り組んでいる。

・高校生年代の中には、大学でアートマネジメント系や舞台技術系の学科を志望する者もあり、照明・音響等専門的な機材の操作やコツを学ぶ基礎的なオペレーター体験参画も行い、この4月から志望の大学にて舞台技術を学ぶこととなった。

・今後は令和6年度からの「劇場インターンシップ制度」の本格導入に向けて、大学生・専門学校生の職業研修的な受け入れ体制についても制度設計し、そのキャリア・ニーズに応えると同時に、新しい地元出身劇場人材の育成を目指しており、方向性としては、「企画制作」と「舞台技術」のスキルを併せ持つオールラウンドタイプの人材を育成して行きたい。

○運営上の工夫

・「劇場運営参加」をベースとしている部活動のため、必要な資材等は劇場内で調達が可能である。今後、本活動を財源的に自走させていく上では、地元の企業・団体・個人の皆さんの寄付金によって未来を担う子どもたちのしなやかな心に、豊かな舞台芸術体験を提供している「あしながおじさんプロジェクト」の資金調達をさらに強化し、将来の可児市マーケット(10万人)を維持する上で重要な存在となるだろう今の子どもたち世代の地域への定着化を主な目的としているアールの活動及び本事業への支援(一口:3万円)を積極的に働きかけていく予定。

・国のパイロット事業として実施した本年度は、とにかく何事にもフレキシブルに対応することで事業を成立させた部分もあるが、実施主体の負担を減らし、多世代の交流を促進する上でも、実施日程・体験手法の体系化と市民サポーター等の育成による運営バックアップ体制の構築を、もう一つの主体となる教育委員会と協議しながら、この先3年程度で確立して行きたい。

○継続的な運営に関する課題・展望

・本事業は可児市教育委員会の掲げる「令和4年度可児市教育委員会の方針と重点」の基本目標Ⅱ「未来社会を切り拓くための資質・能力の育成」― 施策1「コミュニケーション能力の向上」に該当する主に中学生を対象としたプロジェクトであり、これまで継続的に実施してきた『児童生徒のためのココロとカラダワークショップ』や不登校児童生徒のための「スマイリングワークショップ」の活動と連動するものであり、可児市教育委員会との共催関係の下、今後も持続的に実施が継続されるものである。また、その運営資金の捻出に当たっては、地元の企業・団体・個人の皆さんの寄付金で子どもたちの未来を担う子どもたちのしなやかな心に、豊かな舞台芸術体験を提供している「あしながおじさんプロジェクト」の支援対象を拡充し、これをさらに強化することで、将来の可児市マーケット(10万人)を維持する上で重要な存在となる子どもたち世代の地域への定着化を主な目的としているアールの活動及び本事業への支援(一口:3万円)を積極的に働きかけ、官民一体となって本事業の持続可能性を高めていく。

・地域との連携に当たっては、2020年度から構想を進める文化芸術を活用した社会的処方箋活動『まち元気そうだんさうらうテーブル』という地域の社会機関・民間ステークホルダー・アーティストとの「プログラム共創化」に向けた話し合いの場を組成している。今後は相互の活動の理解と連携を深めると同時に、「つながり醸成」に関する共通課題の緩和策を協働で考えるために、令和5年度より、各機関の代表者級を集めた意見交換会を実施する予定。また、地域にて具体的な取り組みを行っている市民活動に活動の場を提供する取り組みをこれまで関わったメンバーとともに定期的開催し、個々の課題と文化芸術によるコミュニティ・プログラムをつないでいくくみを構築する。こうした取り組みを通じて、さまざまな境遇の子どもたちと文化芸術との有機的な接点を見いだしていく。

・2008年度より15年間に渡って実践してきた『まち元気プロジェクト』のノウハウや人的リソースを活かし、市民それぞれの得意分野を活かして、子どもたちに文化芸術および地域文化を活かした体験の扉を提供することのできる人材バンク「まち元気サポーター」の募集および人選・登録を2023年度より開始し、順次研修プロジェクトを発足させる予定である。

・会費の徴収に関しては、レクリエーション保険加入および共通デザインのTシャツ等を作成する観点から1,000~3,000円程度の入会費徴収を検討していく。(但し、寄付金との兼ね合いもあり、全ての参加者を対象とするかについては未定)

・本事業が、今後可児市が推進する「学校部活動の地域移行」を進める上での対象事業となるか否かは現時点では不明であるが、現状よりも活動の幅を広げる場合には、民間からの資金調達等を積極的に導入する方針である。

○令和5年度からの学校部活動の段階的な地域移行に関する方針・提案

・今年度のパイロット事業を通じて見えてきた学校部活動の現状は、

- ①文科系・美術系部活動の縮小・廃部傾向が著しいこと。
- ②部活動の目標が大会・発表会への出場に重点を置かれており、参加資格要件が厳しすぎる点。
- ③一方で、学校外文化活動に対するニーズは高く、参加した多くの児童生徒は、「同じ価値観や感性を共有する”新しい仲間”との出会いと繋がりを求めており、特に中学校1年生のエントリーが目立ったこと。
- ④活動報告会での子どもたちの発表から見えてきたものは、自分たちの活動を通して「誰かを喜ばせたり、楽しませたりする体験」から得られる自己肯定感・自己有用感は、将来の働き方や社会・親子の接し方に至るまでに大きな影響を与えているのだという確かなメッセージであった。

劇場や地域の人的リソースの持つ「芸術文化プログラム」を活かし、ビジョンを共有する地域機関や民間企業と「財源」をシェアするとともに、その活動を下支えする「市民サポーター」組織を組成することで、<地域に持続可能な多世代による支え合いのネットワーク>を構築することを、今後5か年の目標に掲げ、その一環として『まち元気部』の活動を発展させていくことを目指します。

○令和4年度 取組状況等

参加者	人数等	28名(中学生12名／高校生16名)
	学校名	可児市立中部中学校、西可児中学校、蘇南中学校、美濃加茂市立東中学校、犬山市立城東中学校、岐阜県立可児高等学校、加茂高等学校、私立美濃加茂高等学校、明誠義塾高等学院(通信制)、令和さくら高等学院(通信制)ほか
	募集方法	一般公募 ・市内中学校に全校配布を実施 ・アールおよび市内関係施設に募集チラシを掲出 ・当館HP、SNSでの告知
指導者	人数等	15名～25名
	募集方法	事業実施主体において信頼できる人物を人選、指導依頼を行った。 ・財団職員6名(企画制作3名、舞台技術3名) ・その他外部指導者(有償14名、無償5名)
参加者の移動手段		参加者各自で対応(徒歩、自転車、保護者送迎ほか)
活動費用	指導者謝金等	407,750円
	その他	994,805円
活動財源	会費	特になし
	その他	特になし
スケジュール	基本活動	不定期開催／主に水曜日の夜間と土日祝日の昼間に実施 (*火曜日は休館日のため原則として実施せず) 総実施回数66回(2022年6月～2023年2月、月平均7.3回)
	年間	別紙「年間事業計画」参照
保険加入等		劇場施設内での実施に伴い、施設損害賠償保険を適用する考え方

【活動の様子 (PV)】 <https://youtu.be/wcAl2gMqKGw>